
最速の男

小林弘和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最速の男

【Nコード】

N1393B

【作者名】

小林弘和

【あらすじ】

3年前、日本最速の男が失踪する事件があった。3年後に発見された男は、瀕死の状態であった。ひよんな事から、失踪の謎を調べる事になったわたしは、両足を移植手術した真実を知る。その足とは、世界記録保持者の足であった。

1 きっかけ

モモ上げは、陸上部の基本です。同じ場所で、走っているようにモモを上げ続ける、過酷ですが、地味な練習なのです。しかしこれは、基本中の基本で、太ももを高く上げる筋力と真っ直ぐにあげる技術は、走ることにすごく重要な要素でした。今思うと、かなり胃に悪いと思う運動ですが、その当時は必死になって上げていました。

理由は、とにかく早く走りたいから。

それだけでした。陸上部の、特に、短距離のメンバーは、誰もがそれを望む。「最速こそ、最高だ。」そこに、怖さがある。

この話は、僕が高校生の時、陸上部の間でうわさになっていた事件が発端なんです。隣の高校で、ある天才的な選手が突然現れ（名前はユキオといった）、そして突然消えた。覚えておられるでしょうか？

やれ、「神隠し」か、やれ「誘拐」にあつたんじゃないかと、すごい報道になりましたので、貴殿もご存知であるかと思います。

ユキオはそれから3年後、京都の山奥で瀕死の状態で見えませんでした。

大学でも陸上を続けていた僕の耳にその情報が入り、僕は友人と二人で面白半分、彼の自宅を訪ねてみる事にしました。もちろん、彼に怪しまれることが無いよう、当時のマスコミの名刺を利用しました。当時、僕たちも、インタビューを受けていたので、そのアイデアを思いついたのです。彼は、まんまと名刺を信じ込み、3年間の真実を語ってくれました。

どうして、ユキオに興味を持ったか？って？

最初は僕も、行く気がしなかつたんです。それより、大学に入ってようやく彼女が出来たところだったんで、早く終わらせて帰ろうとさえ思っていました。ところが、きっかけは、友人の話でした。「おれ、うわさ、聞いたんだよ。ユキオって、ほんとに、めっちゃ

くちや足が遅かったんだって」

「じゃ、努力の人？」

「それが、ほんとにある日突然なんやって」

わたしは、出来立ての彼女の裸を思い浮かべて、

「どんな練習や・・・？」

そのあとの友人の言葉が、

「だから、聞いたんだよ。足、移植したって・・・速くなるために」

僕は、幼い頃から本を読むのが趣味で、乱歩やドイルなどの探偵物にいたく傾向していましたので、文章にも自信がありました。先生に、ぜひとも認めてもらいたくペンをとったしだいです。

2 衝撃

初めてユキオを見たときは、まさに衝撃でした。

ユキオは、高校1年のときは、いたって平凡な選手でした。それは、わたしも陸上をやっていたので、県内の名のある選手は一応頭の中に取りました。わたしが、ユキオの名前を始めてきたのは、2年の春の記録会の時でした。わたしが、サブトラックでアップをしていると、

「おい、マサル、聞いたか？ユキオってやつのタイム」

「ユキオ？誰、それ」

「T高校の2年なんだけどな。タイムが、10秒切ってるんじゃないかって」

「10秒？」

当時、ベン・ジョンソンが、薬物問題で世間を騒がせていたので、わたしは、

「ドーピングか・・・黒人？」

と、笑って言いました。

が、その友人は真剣な顔でこう続けました。

「今、ゴールで審判たちが集まって、協議してるわ。行こうぜ」
わたしと友人は、急いで競技場のスタンドを駆け上がりました。

見ると、ゴール付近でブレザーを着た男たちが、血相を変えて何かを話し合っています。そんな光景、今まで見たことなく、そばにある電光掲示板は、明らかに「9'99」を表示しています。

観客席から、ざわざわと「怪物だよ」などの声が聞こえ、

「追い風参考にするんじゃないか？」

友人は、わたしに耳打ちしました。

「もう一回、走らせる」

「薬やってんだろ！おい！」

「そうだ、信じないぞ。日本人の足の速さじゃねえぞ！ありや」と、スタンドから声が飛びました。その時です。スタンドの下からゆっくりと男が出てきました。Ｔ高校のジャージを着た、見たこともない男でした。すらりと伸びた足は、わたしの目にも「速さ」を感じさせました。観客たちのざわめきから、その男がユキオだと感じました。

アンバランスな体つきがやけに印象に残っています。ひよろひよろの足に、ごつい上半身で、さながら神話に出てくるケンタウロスでした。顔も、自信に満ち溢れており、あごひげの似合いそうな顔立ちです。

ユキオは、ゴール付近まで歩くと、スタートに向かってピタツと静止しました。風は、ユキオの髪の毛を逆立たせるほど吹いていました。次の瞬間、ユキオはスタートに向かって走り出しました。

観客席から「おお」という声がいっせいにわき、およそ１０秒後に静まり返りました。

わたしの目から見ても、彼の速さは本物でした。今まで見たことありません。ここにいる全ての人間より、彼の足は間違いなく速いでしょう。いや、ひよっとしたら全人類より速いんじゃないか？そんな気さえ起き、気がつくとも体が震えていました。

3 わたし

わたしが、陸上を始めたきっかけは、ただ走ることが好きだったから。それだけでした。小学校の頃は、みんながサッカーか野球をしていました。が、わたしは、そのどれもあまり好きにはなれず、やってみても玉をうまく扱えません。どちらかというと、暗いほうの子供であつたわたしは、放課後の八割を家の中で過ごしていました。テレビや本がわたしのスポーツでもありました。でも、走ることだけは好きでした。

中学に入るとき、みんなクラブ活動をする聞き、「自分もなにか始めないと」と、あせつた挙句、「自分には走ることしか出来ない」と気づき、陸上部を選んだのです。

体育祭で、その悲劇は起きました。

クラス対抗のリレーのアンカーに、陸上部の自分が選ばれました。トップでバトンをもらったわたしは、残り100メートルで、サッカー部の同級生に抜かれました。わたしは、ショックで誰とも話さず会場を後にしました。その日、プールのフェンス付近で、

「あいつ、サッカー部に抜かれてやんの・・・」

と、陰口を聞きました。それが、わたしのプライドを作りました。わたしは、本気で速くなりたかつた。陸上部は走るだけで、サッカー部は、走つて玉を蹴る。なのに、サッカー部の方が足が速い。中学生の単純な思考回路では、明らかにわたしのほうが劣っているとみなされる。こんな辛いことはないな。わたしは思い、その日から、練習に力が入りました。

高校では、そこそこの速さになってはいましたが、結局、県の大会でも名のある高校の選手に負け続けていました。それよりも、同じ部の中に高校から陸上を始めて、わたしより速い選手がごろごろ出現してきました。元サッカー部もいました。「じゃ、中学でもやっつけよ」と、心の中でつぶやきましたが、走ってみるとやっぱり

わたしより速いのです。

いつまでたつても、飛びぬけた速さは、身につきません。ところがある日をきっかけに変わっていきます。

わたしは、自分の記録を塗り替えた、といつても0.3秒だが・・、それに喜びを感じ、そしてみんなも喜んでくれました。今まで、どうやっても越えられなかった11秒7

の壁を破ったのです。そのことで、自分で自分に勝った気がしました。

陸上という、走るだけのスポーツは、相手に勝つというだけではありません。むしろ、自分の記録に挑戦するというニュアンスが強いスポーツです。

けれど、それを教えてくれる者がいない場合、あるいは、それに気づかない者の場合、「飛びぬけた速さ」を求める者が現れます。

わたしはやがて、「飛びぬけた速さ」を忘れていきました

そんな時、ユキオを会場で見ました。

その日から、ユキオの話題で日本中が沸きかえりました。

「彗星のごとく現れたランナー！」

「日本人初の9秒台！」

新聞の見出しで大きく報道され、3年後のオリンピックの話まで飛んでいました。しかし、所詮は陸上です。半年も経てば、話題は消えていました。

わたしは、頭の中で沸き返る「飛びぬけた速さ」を思い出し、ユキオの試合を嫉妬と興味で見っていました。あるとき日本選手権で優勝したユキオは、初めてインタビューに答えていました。

「優勝おめでとうございます」

「はい、どうも」

「しかも、日本記録・・・。まず、感想を聞かせてください」

「当然・・・かな」

「・・・一体、何処まで速くなるんですか？」

「もういいです」

「は？」

「だから、もういいんです」

「……この調子でオリンピックでも、一番良い色をとって下さい」

「わかりません」

「そ……そうですね。わかりませんよね。では、怪我に気を付けて頑張ってください」

なんとも後味の悪いインタビューであった。

ユキオはその直後、行方不明になった。警察の懸命の捜査にも関わらず、ユキオの足取りはつかめず捜査は打ち切りとなった。

4 ユキオの部屋で

晴天が続く午後、わたしと友人はユキオの自宅にたどりついた。名刺を提示すると、ユキオの母は部屋に案内してくれた。

部屋は、ベッドと本棚、机だけの簡単な構成で、ユキオは青白い顔でベッドに寝ていた。ユキオは、窓の外をずっと見ているので、わたしは、天気の話から入った。ユキオは、すっと笑顔を取り戻し、

「太陽は大好きです」

と、答えた。

わたしは、早速聞きたかった一言を口にした。

「もう走らないんですか？」

ユキオは笑って、

「もう、走れないんです」

「なぜ？」

友人は、ニヤニヤして、

「普通の足になったから？」

ユキオは、布団をめくりわたしたちに足を見せた。その足は、自分で切りつけたと思われる無数の傷でカサブタだらけになっていた。

「博士は、僕を、興味本位で手術したんだ・・・」

「博士？」

わたしと友人は目を合わせました。

それから、ユキオはわたしと友人に、過去のことを話し始めた。まず、その感想は、わたしと境遇が似ていたこと。ユキオもまた、どちらかといえば暗いほうで、速くもない陸上の選手であった。そしておそらく、「飛びぬけた速さ」を求めた時期があったのである。そんなとき、ユキオは事故に遭い、3ヶ月ほどの入院を余儀なくされたという。その時、病院で声をかけてきたのが、博士だった。博士は、骨折したユキオが悲しんでいるのを見てこう言ったという。

「わしが、速い足をつけてやるう」

「うそつけ」

「ベン・ジョンソンの細胞を持つてる」

「ドーピングの選手や。いらんわ」

「足を培養して、君に付けてやるう」

「そんなことで速く走れるもんか」

「日本一になりたくないのか？今まで、自分をバカにしてきた連中を見返したくないのか？」

「でも・・・」

「いつでも待つてる」

博士は、連絡先を置いて去っていったという。

「じゃ、ほんとに手術・・・移植したんだ」

「怪物だよ。こんな足、付けなきゃ良かった」

「どうして？」

「そりゃ、速くなりたかったけど。速すぎると、はた目には気持ち悪いんだ」

「僕はうらやましいけど・・・」

「最初は嬉しかった。練習しなくてもどんどん速くなる。足が勝手に成長してる感じだ」

「記録会のおときだ」

「そう・・・かな。レースに出始めたのもその頃だ。バカだけど、自信に満ち溢れてたよ。周りのみんなもびっくりしてた。でも、そのうち、怪物だ、薬漬けだといわれ始めた。僕は、どうしていいかわからず博士に相談した。実際、もう速く走れなくても良かった。僕は走ることが好きだけだったのに」

ユキオは、まくし立てるようにしゃべり、一息をついた。

「博士はなんて？」

友人は、わたしより先に聞いた。

「お前は、怪物だよ。もっと速くなるんだ。もっと世界を驚かすんだ・・・と」

その時、ユキオは自分の間違いに気づいたという。ユキオが、見たかった自分は、自分で自分を強くする姿であり、借り物の強さではないことを。

わたしは、ユキオに同情していた。自分だって、そんな間違いを犯す可能性がある。自分をうまく表現できたり、得意分野があるわけでもないからこそ、博士のような人物に会えばどうなっていたか分からない時期があった。

「あるときから、博士と連絡が取れなくなった」

「逃げたんか？」

「分からない。だけど、僕は自分の足が何処まで速くなるか分からなかったし、そんな自分をもう見せたくなかったから、博士を探の旅に出た」

ユキオは、わたしたちを見た。

わたしは、その博士を憎み始めていました。

5 長い手紙の終わり

そのあと、ユキオは僕たちに「この怪物を切ってくれ」と、頼み込んできました。「もう走りたくない・・・」しかし、わたしは、ある思いがあり、「頼むからもう一度だけ、走ろう」と勇気付けました。最初ユキオは嫌がっていましたが、わたしの説得もあり、もう一度走ることを承諾してくれました。

翌日から3人でトレイニングが始まりました。練習は、モモ上げから始まりました。

お忘れかも知れませんが、3人とも走ることが好きでした。特に、わたしと友人は、速く走れるわけではありませんが、汗を流し、苦しいところまで自分を追い込み、終わった後の爽快さというものはスポーツをするものしか得られない感覚でしょう。

そして、このとき一緒に走るユキオの顔を、わたしは生涯忘れることはないでしょう。

なんと嬉しそうに、モモ上げをするのでしよう。

ユキオの足が、怪物として復活していく様は、切なく、物悲しいものを感じました。博士は、そんなに悲しいものを創造したのです。お分かりでしょうか？

何ヶ月もかけてユキオの足を生き返らせると、そこからは速かったです。みるみるスピードを増していき、全盛期の足に戻りました。

時期が来ていました。

わたしは、友人とユキオと共に、あなたのいるアメリカへ旅立ちました。

ユキオは3年間も、あなたを追い続けたそうですね。日本一速い足で、追われる恐怖はいかがでしたか？ユキオによると、何度か捕

まえるチャンスがあったのだが、逃げられたと聞きました。果たして、まんまと逃げおおせたとお思いでしょうか？

それは、この手紙が答えです。

若者の欲望に付け入り、人生を台無しにさせた代償を、わたしたちはどうしようか考えています。このレースのゴールは、日本選手権でも、オリンピックでもありません。ゴールは、博士です。

大学生というのは、時間が余って仕方ありません。しかも、その大学というところは、あなたのような人間を探すのに、さして苦労はしませんでした。

逃げてでも無駄だと思います。なんせ、彼は日本最速、いや、記録は分かりませんが世界一の男です。博士の家の窓を全て開けておきました。今からでも逃げていただいて結構です。わたしたちは、1ブロック先のカフェから走り出します。

さあ、勝負しましょう。

ヨーイ……。ドン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1393b/>

最速の男

2010年12月28日02時34分発行